

山と博物館

第16巻

第6号

1971年6月25日

大町山岳博物館



梅雨前線の通過する中瀬湖のほとりで魚信を待つ時。

撮影 長 沢 英一

釣座に想う

つゆに入れば湖沼の釣りは盛期となる。水位が上り産卵のために浅場に乗っこむフナやコイの大物をねらえるからだ。近年レジャーブームの現れか、ここ仁科三湖にも休日には色とりどりの釣り人がおしかけている。しかしこれら遊漁者においやられてか、昔なつかしい和船の上でのんびり網や、ろうやをたぐる漁夫の姿が見られなくなったのはさびしいことである。プラスチックのモーターボートが湖上を飛び廻るご時勢だから釣り師たちの道具も竹竿がグラスロッドに、えさのミミズもポテトに変わり、スポーツとして釣果を競う競技会もひらかれる始末、めいわくしているのは釣魚たちであろうか。だが逃した魚の大きかった話をしたり、十センチたらずの釣魚を両方の掌で過大表現するあたりは、やはり今も昔も変わっていないようだ。ふりしきる雨の日でも、ジリジリ照りつける太陽の下でも釣果の多寡はともかく、自然に接したい一心に釣りに出掛ける釣り師もいる。車、騒音、排気ガス、そしてGNPからも逃だし、草いきれのする釣座に座すれば、水面にたわむれる一群のあめんぼの動き、そして足もとのよしかげで遠くのうぐいすの声をかき消すようにけたたましく鳴くよきりあり、湖面をわたる微風が緩す光と波のオブジェ、そんな中で直立する浮木先をじっとみつめる時、つり人はまわりの自然に溶け込んでいる自分を意識する。ふとかすかな魚信が浮木先に現れ、竿をおおればたしかな大物の手ごたえ、そして満月にしぼられた竿から腕へと伝って来るあの感触、つり人みよりにつきる一瞬であるひねもすくりかえす静から動、動から静へのくり返しの中にやがて納竿の時が来る、そしてその時フラシの中の釣魚たちと又の再会を約しながら彼等をそつと元の水に放してやるのである。こうして魚族は乱獲から守られながら今日も釣り師たちの遊漁の相手となっているのである。

(山本携竿)

湿原の植物 (その一)

松田行雄

1 湿原の発達と湿原の植生

湿原は中部地方から北海道の山地にみられる山地高層湿原と北海道の海岸近くにみられる平地高層湿原に分けることができる。山地高層湿原、平地高層湿原はそれぞれ成因は異なっているが森林の生育を許さないような厳しい環境条件下に耐え得る植物によって、湿原特有の群落が形成されている。これらの植物は極めて数少ない自然生の世界分布種であるが、他の植物に対しては競争力は最も弱く環境のわずかな変化にも生育環境を他の植物

に奪われてしまう植物群である。この植物群によって構成されている湿原に一步踏み込んでみるといろいろな植物群落を観察できる。つまり、有機物や無機土壌の流入のみられる河川沿岸部の沼沢地や低層湿原、有機物や無機土壌の流入が全くなく、河川や池塘の水面より高くもろみがあり、時計皿を伏せたような地形で湿原が存続するのに必要な水は雨水によって涵養され、ミズゴケ類がカーペット状に生育し、泥炭の推積をみるような高層湿原、高層湿原と低層湿原の中間にあり、地下滲出水や雨水によって涵養され、泥炭の推積をみ

高層湿原のあしがかりをつくる中間湿原をみる事ができる。大規模な時計皿を伏せたような広大な低層湿原から高層湿原までの各段階を持つ湿原は北海道の平地高層湿原を除くと特別天然記念物に指定されている尾瀬ヶ原と霧ヶ原八島ヶ原湿原で、小規模な高層湿原は県内には北信、中信地方の一部に数多く分布している。また湿原の中には高層湿原に発達できず低層湿原の状態にとどまる湿原、低層湿原から高層湿原まで発達した湿原は県内の山地に広く分布している。これらの湿原に生育する植物は湿原の発達段階によって異なる。従って湿原に生育する植物をみるだけでも湿原の発達段階を知ることができる。

(1) 低層湿原では丈の高いヨシが生育しオニナルコスゲ、オオカサスゲなどの大形のスゲ類も生育し、小さい丘のようにもろみあがった形で谷地坊主をついている。その他にオオバセンキユウ、ミゾソバヒメシダ、ミズスギナ・ドクゼリ・リュウキンカ・クロバナロウゲ・ミツガシワサワギキョウ・ミズバシヨウ等の植物が群落をつくっている。ミズゴケ類はシタミズゴケ・コアナミズゴケが湿原の一部に生育しており、中間湿原に生長する足がかりをつくるオオミズゴケ・ヒメミズゴケが僅かに生育する。

(2) 中間湿原は草丈も低くなり、30cm前後のヌマガヤ・ホロムイソゲ・ミズギク・コバギボウシ・ヤチカワズスゲ・ミタケスゲ・エゾリ



写真① 代表的な高層湿原霧ヶ原八島ヶ原。鍵ヶ池、鬼ヶ泉水、七島八島。中央部のもりあがった部分はチャミズゴケ・イボミズゴケ・ムラサキミズゴケが一面に生育し、ヌマガヤ・ヒメシタクナゲ・モウセンゴケ・ワタスゲ等湿原植物が生育している。



写真② 中間湿原の入笠山大阿原湿原。イワノガリヤス・ウメバチソウ・ヌマガヤ・アゼスゲなどが生育し、オオミズゴケ・ヒメミズゴケが一面に生育している。一部にチャミズゴケ・スギバミズゴケ・ムラサキミズゴケの生育する高層湿原がある。

ンドウ・トキソウ・アサヒラン・ウメバチソウが一面に湿原をおおい、オオミズゴケ・サケバミズゴケ・ヒメミズゴケ等のミズゴケ類が生育する。これらのミズゴケ類はヌマガヤ・ホロムイソゲなどと泥炭の形成を速め次第に高層湿原へ移行していく。この移行している段階では高層湿原に生育するモウセンゴケ・ワタスゲ・イワシヨウブ・ツルクケモモ等の植物がみられる。

(3) 高層湿原は厚く推積した泥炭層(霧ヶ原7(8)m・尾瀬ヶ原5m以上)の上にミズゴケ類が厚くカーペット状に生育している。従って高層湿原はミズゴケ湿原とも言われ地下水位の僅かな高低の変化がミズゴケの種類がわかれば地下水位の高低がわかり指標植物になる。ミズゴケ類は日本には39種が知られ、そのうち日本固有の種が7種、熱帯地方に分布の中



写真③ 南軽井沢地蔵ヶ原の低層湿原。ヨシが一面に湿原をおおいミズゴケ類はほとんど生育していない。

心をもつ種が1種であり、31種が北極周辺に分布の中心をもつ世界広分布種である。この31種の北周極要素の種のうちチャミスゴケ・スギバミスゴケ・ミヤマミスゴケなどの種は高層湿原の終極群落(クライマックス)として生育する種で、イボミスゴケ・ムラサキミズゴケ・フナガタミスゴケは湿原のややもろあがつた凸区(ブルト)に生育し、キダチミズゴケ・ワタミスゴケは山地高層湿原の泥炭層の薄い斜面の凹状地に主に生育する。従って31種といっても約8種のミスゴケ類が湿原の植生を決定づけている。泥炭層の厚い凸地に生育するチャミスゴケ・スギバミスゴケ・ミヤマミスゴケ・イボミスゴケ・ムラサキミ

ズゴケ・フナガタミスゴケはツルコケモモ・ヒメシヤクナゲと結びつきブルトの植物群落をつくり、キダチミスゴケ・ワタミスゴケはイワカガミ・イワイショウブ・イワイチヨウ・ノハナヒゲ・ヤチカワズスゲ・シラネニンジン・ウメバチソウ等雪田に生育する植物と結びつき山地高層湿原の植物群落をつくっている。両方に共通して出現するのはヌマガヤ・ワタスゲ・モウセンゴケである。

湿原植物群落は終極相に達し、泥炭の推積が速まり凸地(ブルト)が高まれば高まる程地下水水位は低下し乾燥に傾く、従ってミスゴケ類の生育は停止し、乾燥のために地衣類のハナゴケ類や蘚類で乾燥地にも生育できるスナゴケ類やキボウシゴケ類が成育し始めると泥炭形成はほとんど停止する。しかし周辺部のミスゴケの生育していた部分は次第に泥炭の推積のためにブルト状になってくるとスナゴケ・ギボウシゴケの生育していた部分は凹地(シュレンケ)化し、雨水が溜り、地下滲出水のために水溜りができるようになる。このよう



写真③ プルトの部分(浮島)が風や波によってとり残された浮島上にはヌマガヤ・イボミスゴケが生育しているが、この浮島も数年後には水面より姿を消す運命にある。



写真④ 広大な面積を占める山地高層湿原の池漥群。苗場山湿原。

なシユレンケにはウツクシミスゴケ・ガツサンミスゴケが生育し、ミカズキグサ・ホロムイソウ・ナガバモウセンゴケ・ヤチスゲ・ミヤマイヌノハナヒゲ等がかわつて生育し、シユレンケの特殊な群落をつくるようになる。このシユレンケも地下水水位が低下しシユレンケより乾燥に傾くと附近のミスゴケ類が生育し再びブルトを形成する。しかし地下水水位が附近のブルトからの滲出水で高まってくるとシユレンケは次第に水量を増し、いわゆるガキ田(池漥)を形成する。

池漥には浅いものから深いもの

までであるが、浅い池漥にはミヤマホタルイ・エゾホソイが生育し、深さを増すと従ってミツガシワ・クロヌマハリイ・オゼコウホネやネムロコウホネ・ホンバタマミクリと水生植物群落に変化していく。湿原に点在する池漥は等高線に平行に分布しているのが観察できる。これは湿原からの滲出水のためである。池漥と池漥の間隔が広いところでは深く広い池漥が形成されているが、池漥間隔の狭いものは浅く、水量も少ない池漥が形成されている。池漥のある高層湿原には浮島が形成されている

①これは池漥と池漥が成長していく時に連絡しあいブルトの部分がり残されたもの②池漥の端が波や風のために切断されて浮島になったもの③大きな池、池漥にヒツジグサ・ジエンサイ等の浮葉植物が繁殖し始め周辺部からはヨシ・ホロムイソウ・ミツガシワ・ヌマトラノオ・フトイ・コウホネ等が侵入し泥炭を形成し浮島となったものなどが考えられる。しかしほとんどの浮島は①・②が大部分である。近接した池漥にはほとんど浮島はみることが少ないのが原因している。湿原には破壊した池漥もみられる。これは浅い池漥が風や波の働きで次第に面積を増し、隣の池漥との間も狭くなり、水を保ちきれなくなつて傾斜地のために水は流出し池漥の破壊がおこつたものである。しかし湿原全体に比べると小面積のために短い時間でヤチカワズスゲ・ミタケスゲ・ミヤマホソコウガイゼキショウ・シロバナワレモコウ等の代償植物群落ができ、ミスゴケ類も生育を始め、ミスゴケ湿原へ回復している。

以上が湿原の発達と植生の概観であるが、

湿原の発達は泥炭層の推積状態によつて決つてくる。これは地下水水位とミスゴケ類の生育の状態、それに結びつく植物の関係からきまり、常に湿原は生長し、クライマックスに達すると衰退をたどり再び生長を開始する。



五月の山に想う

長沢 武

我々山国の者には、海の色は晴れた日と雨の日の違いぐらいいか解らないが、海辺に住む人には四季折々の変化はもちろんその日毎にも変って見えるものだ、という文章を以前読んで感銘を受けたことがあり、私の探し求めていたものに行き逢ったような、私の言いたいことを先に言われたような感じを受けたことを覚えておる。

たしかにアルプスの麓に暮していると、一見何の変つてもないような山の色であるが、海の色のように、その日その日の天候で、朝陽のさしぐあい、雲の位置などにより、山の輝き方や色が随分違うものだと驚く。特に上りの雪嶺や、春の鹿の子まだらの残雪の亜高山帯の山肌には、ブナやシラカバの芽吹きがはじまった頃の山は毎日見ても飽かないすがすがしさを帯びている。目に青葉山ホトトギス……とはこの頃のことをいうんだらうなどと一人考えながら、田んぼの畦に腰をおろして雪形や古い山の名前を探していると、つくづく山麓に住む有難さが解る。

ところで、私はここ二十年來田植が済むとイワナ釣りや山菜採りに行くことにしている。僅か四〜五日であるが、朝四時半から夜の八時近くまでみっちり植えると、最後には根も精も尽きて子供のように、早く済ませて釣りに行くのがどんなに待ちどおしいことか。私は子供の頃から自分なりに覚えてきた餌釣りの方法で、この時期には一日に二〇〜四〇匹は釣っている。

ようやくの思いで田植を済せ、いそいそと行く谷川は、この頃フジの花が満開、銀ネズ色のナラの若芽が伸び始めた時で、ハナグモやシヤクトリ虫、雪融水が減水し始めた川底

には、水あかがすつかりついた小石に、これもイワナの好物のカゲロウの幼虫が沢山棲んでい、さらに奥へ行き酸性の強くなった流れにはカワゲラやハコネサンショウウオの幼成がいる。これらのイワナの餌になる水棲昆虫を観察しながら、一人釣るだいたい趣味は、学問の世界から遠ざかって久しい私にとって、懐かしい思い出の数々を秘して、最近の唯一の楽しみである。

さて、山菜の方は雪消え近くの沢筋を尋る一般的には山菜は五〜六月のものとしており、この頃が最盛期である。大体イワナの棲息終点の辺から上部でいい山菜が採れる。アザミ・コゴミ・ヨモギ・ゼンマイ・ウドなどは誰にも採れるが、ウトブキ(ヨブスマソウ)・シズクナ(モミジガサ)・フキダチなどは自生地が限定されているので、誰にも採れるようにならば山菜採りも一人前というもの。文字通り深山幽谷の地を尋ねなければ手に入ることができないものばかりで、姫川流域ではこの三種は東西両山塊の二〇〇〜六〇〇坪辺で採ることが出来る。

最近チクロやサルチル酸など食品添加物やDDTなど残留度の高い化学物質が、公害問題と一緒に問題となっている所から、山菜や漢薬薬ブームが起っているようであるが、結構なことである。しかし、今年のような音を聞いてみると、マイカーを利用して山菜採りに山に入る人はおびただしい数になって、もうこのまま放置しておけない限界にまで来ているという。

車を利用し、日曜の一日を家族づれでハイキングをかねたワラビ採りなど、自然に親し

み一家団らんの良い機会であるが、山菜の根や花木の根を掘り取り、椎茸のホダ場を荒しタバコの火を投げ捨てるなど地元ではその行為が問題となっている。まことになげかわしい限りで、自然保護思想の遅れを感じるものである。

ところで、自然保護といえ、最近国有林の過伐、乱伐やスキー場など観光開発による自然破壊が問題となっている。大田市や白馬村でもこの頃自然を守る会が発足したが、時宜になつたことであり、発起人の人達や推進の中心をなしている若い自然愛好者の方々に敬意を表すると共に、今後の会の活動に期待したい。

考えてみると自然界は、全て因果関係にあるが、科学の進歩発達で、今までのような、自然との調和を考えない乱開発をもたらすものであつてはぜつたいにならない。例えば自然開発という名前のスノーパードやスキー場開発の場合、まず原生林の伐採から自然破壊が始まるが、国有林のブナの原生林の場合は少なくとも樹齢四〇〇年前後はたつているもの、おそろしくこれらを皆伐した場合、今後再びこのような林を得ることは不可能であり、下草のミズバショウやゴゼンタチバナ・マイズルソウなどは直射日光を受けて死滅してしまふし、ここを棲みかとし、また食物を得る場所としていた小鳥や動物達もいなくなつてしまふことはまちがいない。さらに国土保全の面から見ても、集中豪雨の場合には必ずこの流域は大きな災害を受けることになり、魚類は流されて少なくとも三年間は魚はほとんどいなくなり、下流の耕地や人家、交通、通信網も切断されることになりかねない。木曾谷、伊那谷などはこのよい例で全く恐しいことである。

生命力というものは強いようで弱く、弱いようで強いものである。私の住む神城の湿地帯は昔からドジョウとタニシとホタルの名所であったが、農業の使用で急激にその数が減つたままだったタニシは、ここ三三年程の間

に農業の使用制限により再びものすごく増えつつある。そしてこのタニシを宿主とするホタルもまた増えきた。見渡す限り早苗田の続いていたこの盆地の水田も、今年は一割減反で大分あみこちに、休耕地が見え、ヨシ原やガマ畑が広がります。激動の七〇年代というが、石が流れて葉が沈まないようにしたいものだと思う。

(山岳博物館調査員 白馬村神城)

博物館だより

▼「太郎」と「木曾生」に

当館で飼育中のカモシカのうち幼体二頭について、愛称を公募してきましたが、このほどそれぞれ愛称が決まりました。昨年五月二十九日、当館ではじめて飼育繁殖によって出生したカモシカは「太郎」、南木曾町で保護され、当館で人工哺育されたカモシカは「木曾生」と名付けられました。

▼カモシカ第二仔生れる。

カモシカ夫婦「大助」・「あつ子」の間にまた可愛らしい赤ちゃんができました。去る五月二十日に生れ、その後、母カモシカの乳を飲んで順調に育っています。

▼幼体二頭を保護受入れ

去る五月二十八日、辰野町大字横川の山林で親からはぐれて衰弱し動けなくなっている生後一週間くらいのカモシカの仔(メス)が保護され、翌二十九日、関係機関の指示によって当館へ引取られました。また、六月十三日伊那市西春近板沢の官行造林地で野兔退治用ワナに首をかけて弱っている生後一ヶ月ほどのカモシカの仔(オス)が山菜採りの人に保護され、当日夕刻、当館へ引取られました。二頭とも現在当館で人工哺育中です。

山と博物館第16巻第6号

発行所 長野県大町市TEL(026)21-

印刷所 大町市下仲町印刷部

定価 年額三〇〇円(送料共)(切手不可)

郵便振替口座番号 長野二二二九三